



Title	モンタペルティ・ベネヴェント仮説より見たダンテの時代
Author(s)	米山, 喜晟
Citation	大阪外国語大学論集. 1991, 5, p. 241-266
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79542
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

モンタペルティ・ベネヴェント仮説より見たダンテの時代

米山喜晟

はじめに

モンタペルティ・ベネヴェント仮説とは、正確には「13世紀後半のフィレンツェ繁栄の原因をモンタペルティとベネヴェントの両戦争の結果に求める仮説」でも呼ぶべきもので、特に従来ほとんど無視されていたと言っても過言ではないモンタペルティ敗戦によって生じた精神的ショックや様々な変化が、すでに何度も指摘されてきたシャルル・ダンジュー王による南イタリア征服がもたらした状況の好転の効果を大幅に助長したと見なしている点にその主眼がある。私はすでにこの仮説に関して、本学『学報』および『論集』各一編の論文を発表しており、いわばその総仕上げとして、約40年後両戦争の結果に基づく変化が完全に現れるにいたったダンテの時代について論じておきたい。

周知のごとくダンテは1265年、モンタペルティ敗戦の結果ゲルフィ党とプリーモ・ポポロの指導者たちが市から亡命中で、市内のギベッリーニ党やナポリのマンフレディ王の与党である周辺の小領主達が支配しているフィレンツェに生まれたが、その翌年にはシャルル・ダンジューがベネヴェントでマンフレディを倒したため、その余波でフィレンツェのギベッリーニ党体制は崩壊し、ダンテはシャルル王の代官を頭に戴くゲルフィ党の支配下で成長した。プリーモ・ポポロと呼ばれる市民階級の支配が復活したのはようやく1282年（ダンテ17才）のことで、それも熱烈な民衆の奪権闘争の結果というよりは、さまざまな事情が重なった結果の窮余の策と見た方が真相に近い様である。すなわちゲルフィ党支配が定着しシャルル王の権力が強大になり過ぎることを恐れた法王 Niccolò III が、Latino 枢機卿をフィレンツェに送り、かつての敵ギベッリーニ党を帰国させて保護することでトスカーナにおける両党派の均衡をはかろうと考え、同枢機卿は両党派による14人委員会体制を採用させたところ、たまたま同じ時期にシチリアでかの有名なシチリア晩禱事件が勃発、トスカーナでもギベッリーニ等の氣勢が一挙に高まったために両党派の緊張が激化して同委員会は機能し得なくなり、ポポロ一般が日常生活を何とか維持して行くための最後の手段としてであった。新しいポポロ政権の中枢を占めるプリーモ・ポポロ達は、アルテを母胎として複雑な方法で選ばれており、当然市民全体の代表であると名乗っていても、それと同時に、あるいはむしろそれ以上に出身母胎のアルテや地区の利益に縛られていたことは明らかである。

このようにダンテが最も多感だったころ、傀儡的性格を伴った貴族支配から、金権的性格の濃厚な商人支配に移行した事は、ダンテのものの見方にとって決して無意味ではありえなかった。従来行われて来たモンタペルティ敗戦の結果をほとんど無視する立場に立つと、この敗戦は当然起こるべき民主的フィレンツェの発展をほんの一時停滞させただけの取るに足りないエピソードだということになるが、それではセコンド・ポポロ成立の遅れや紆余曲折ぶり、その市民を代表する在り方の曖昧さ、あるいはプリーモ・ポポロ当時には考え難いナポリ王国との密接な関係、とりわけ軍事面における長期に亘る依存性や受動性などはとても理解し難いはずである。いずれにしてもダンテが成長したフィレンツェは、彼らの子孫が後に標榜したような輝かしい自主独立の自治都市などではありえなかった。だが皮肉なことに、例えばプリーモ・ポポロ時代のフィレンツェのようないわば英雄的な自主独立の自治都市と比較して、傀儡的な貴族支配や金権的な商人支配の方がはるかにフィレンツェの経済的あるいは文化的繁栄に貢献しえたのであり、もしそうした過程が無かったとすれば、フィレンツェの経済的、文化的繁栄はおろか、ダンテ自身の存在もあり得なかったのである。

一時期は市政に参加し、プリーモ職と言う中枢にあったにもかかわらず、白派に属したために市から亡命せざるを得ず死刑宣告まで受けたダンテは、祖国フィレンツェを徹底的に批判したが、鋭い観察家であると同時に未曾有の緻密な表現者でもあった彼は、祖国の当時の状況に関する余人に代え難い証人でもあった。そこで本論では、まず次章において、『神曲』におけるダンテのフィレンツェおよびその市民に関するいくつかの重要な証言を取り上げて、それがモンタペルティ・ベネヴェント仮説をいかに裏付けているかを論じる。さらに続く最終章において、ダンテの時代にフィレンツェが体験した二大事件である白黒闘争およびハインリッヒ七世のフィレンツェ攻撃とを、同じ仮説に基づいて比較対照することによって、この都市が有する特殊性を明らかにすると共に、この仮説の持つ普遍的な意味にも触れておきたい。

第一章 モンタペルティ・ベネヴェント仮説とダンテの『神曲』

C.T.Davis が近年イル・ムリーノ社から刊行した『ダンテのイタリア』¹⁾は、この著者の長年に亘るダンテとその時代に関する文献学及び文学史的業績をまとめている点で貴重であるが、結構ボレミックな内容を含んでいて、ダンテの時代を考える上で、避けることの出来ない問題を扱っている。その内で最たるものは、前世紀にドイツ人 Scheffer-Boichorst によって提唱され Amari らそうそうたる学者たちによって広範な支持を得たものの、その後反論が続出して一時は Morghen 教授によって完全に否定されたかに見えた²⁾ Ricordano Malispini とその子 Giacotto 作の『フィレンツェ史 (Storia Fiorentina)』が作者の名を騙って後代に作られた偽書だとする説を復活させ、特に英語圏においては優勢を獲得させるに至った二つの論文だろう。Morghen 教授亡き後、その立場を引き継ぎながら論争を受けて立っているボローニャ大学の

M.C.De Matteis の反論³⁾も、Villani が Malispini をコピーしたという Morghen そのままの趣旨ではなく、従来偽書説の主張者たちが Malispini が偽作する際にコピーしたのではないかと見なして来た Villani の『年代記』の『要約 (Compendio)』が、Villani が『年代記』を執筆するに当たって種本に用いた Malispini の『フィレンツェ史』の要約だったのだとする一種の修正意見を取り入れており、Davis が自負するように既にこの問題は決着済みだと断定できるかどうかはともかく、やはり一時期圧倒的に優勢に見えた Morghen の説そのままでは苦しい状況が生じているようである。問題の Villani もしくは Malispini の『要約』なるものが手稿のままであるため、この論争の細部に関しては、筆者などには十分理解できない部分があるのだが、Ricordano を Brunetto Latini と並ぶモンタペルティ戦争期の代表的著者と見なして来た⁴⁾ 筆者にとっては、もし Davis 説が正しければ一人の典型的人物が消える訳で多少残念である。しかしこの時代に関して Villani が Malispini とほぼ同じことを伝えているのだから、私の主張するモンタペルティ・ベネヴェント仮説そのものにとって、この論争の結果がプラスにもマイナスにも作用しないことは、今更いうまでもない。

もっとも Davis が Malispini 偽書説を展開していった過程を眺めると、とくに明確にその説を主張し始めた、「古き良き時代 (Il buon tempo antico)」と題された論文⁵⁾には、私のモンタペルティ・ベネヴェント仮説と若干関係する部分があるように思われる。Davis は先ずフィレンツェ史の否定的な側面の記述者に注目して、Brunetto Latini、Dino Compagni、Giovanni Villani らに触れたのち、しかしただ一人ダンテにおいてのみ13世紀および14世紀初頭のフィレンツェの墮落に関する最も包括的で否定的な理論が見いだされるとして、その理論を簡明に示した後、このように昔をなつかしがる態度は決して新しいものではなくて、Virgilio 等ローマ文学以来のありふれたトポスであることを指摘、そうした観点から特に Malispini、ダンテ、Villani の3人の類似の部分と比較し、Malispini には「道徳的な (morale)」感想が特に少ないという事実を明らかにし、もし同時代の体験者の記録であればそうはならない筈だ(?) から、結局 Malispini が Villani の要約を写したのだと推理している。さらにダンテと Villani の表現を比較し、同一の字句の現れ方や作品の成立年代を考慮に入れた結果、Villani の方がダンテから学んだと推定している。その上実はダンテ自身も当時はトスカーナよりも進んでいた北イタリアの年代記の一つである Riccobaldo da Ferrara の作品『歴史 (Le Historie)』(1308-13ごろ)から学んでいるとして、その『要約 (Compendium)』の中から部分的に似た箇所⁶⁾を引用している。もし Riccobaldo →ダンテ→Villani のこうした貸借関係が認められるならば、14世紀初頭に北イタリアに亡命中のダンテを通してフィレンツェの歴史に採用された、本来楽天主義的なフィレンツェの歴史記述においては異質であったトポスが、1280年代に死んだ Malispini の作品に混入していることになって道理に合わないという訳で、Malispini 偽書説が強化されることになる。

Davis 教授はすでにそれ以前から Malispini 問題を扱って疑問を提示してはいたが、この論文

で（おそらくすでに文献学的により詳細に論じた第三弾⁷⁾を準備しつつ）その立場をより明確にしたのであり、一つのトポスの扱い方の比較を通して結論に至るその大胆な論証の仕方によって、この論文は教授の他の博識かつ緻密な諸論文の中で特異な地位を占めているという印象を受ける。問題は、もしこのトポス説を強調し過ぎるならば、Malispini や Villani が記録しているプリーモ・ポポロ時代とダンテや Villani 等の時代との大きな差異が、事実というよりも「昔は良かった」という常套的な詠嘆に過ぎないと見なされる、という点にある。Davis 自身は決してそこまでは言っておらず、確かにそれは別の問題であるけれども、ダンテのフィレンツェ観を理解するためには避けて通れない問題を含んでいると思われる。ここで本仮説とは直接関係の無い Malispini 問題から離れて、まず確認しておくべきことは、13世紀後半のフィレンツェに関して Malispini や Villani の作品で証言されている大きな変化（それを私は敢えて経済的、文化的発展と呼んでいるのだが）があったかどうかという問題である。すでにその点に関しては、経済的には Sapori や Fiumi 等の研究が⁸⁾がほぼ一致してこの時代の変化の重要性を証言しており、文化的には Bec に代表される統計的研究の成果⁹⁾が従来の記述的方法では不可能な鋭さで、この時代が持つ重要性を証言している。特に興味深いのはフィレンツェの経済・文化両面における後発性の確認で、勿論それを強調し過ぎることは危険だとしても、フィレンツェの発展をイタリア・コムネ一般の発展に還元して、その典型的なケースと見なすことは、誤解を招く恐れがあることを指摘しておきたい。とにかくそうした飛躍と呼ぶことすら可能な変化が現実に存在していた以上、それがトポスであろうとなかろうと、そうした現象に関する記述が Villani 等の作品に記されていたとしても何等不自然でないばかりか、むしろ当然だと言えるのではないだろうか。

ダンテ自身の証言について考える場合、それが『神曲』そのものの構成と深く関わっていることを忘れてはなるまい。すなわち『神曲』の読者には周知の通り、『地獄篇』第六歌で Ciacco が白派の敗北と追放を予言（49-75）し、同第十歌で Farinata degli Uberti がダンテ自身の追放を暗示（49-51）して以来、『天国篇』第十七歌（19-99）で Cacciaguida によって自らの運命とそれに対する心構えを示されるまで、白黒闘争の悲惨な経過とダンテ自身の追放は、Brunetto Latini に代表される三界の霊達とダンテとの主要な話題の一つであり、それを通じてダンテはフィレンツェにそうした不当な事態が生じた原因を、当時としては可能な限り深くかつ包括的に追及していると言えるのである。これら一連の対話こそダンテと当時の現実との接点とも言えるもので、『神曲』の構想の根幹にも相当する要素である以上、たとえば問題の Cacciaguida が過去のフィレンツェを賛美している箇所等も、部分的には Davis の指摘どおり Riccobaldo の影響が認められるとしても、少なくともそうした話題自体はいくら遅くとも Farinata や Brunetto Latini（『地獄篇』第十五歌）との対話の執筆当時から、そしておそらくはもっと早く作品の執筆当初から予定されていたと見なすべきものなのである。白黒闘争とその不幸な結果の直接の責任者は、腐敗した協会のシンボルのようなボニファチオ八世であり（『天国篇』第十七歌 49-51）、その手先はシャルル・ド・ヴァロア（『煉獄篇』第二十歌

70-78)だとされているが、勿論それに劣らず責任が重いのは、コルソ・ドナーティ（『煉獄篇』第二十四歌 82-88）に代表される墮落したフィレンツェ市民であった。ダンテはフィレンツェの不幸には、古代の軍神 Marte の呪いとも呼ぶべき宿命的な性格があることを一応認めている（『地獄篇』第十三歌 143-50）。しかし Cacciaguida が生きていた「古き良き時代」には人々は貧しくとも幸福だったことも事実で、ダンテは Cacciaguida の口からそうした幸福な状態が終わったのは1215年のことで¹⁰⁾、すなわち Uberti 家を中心にギベッリーニ党を結成する人々が婚約不履行の復讐として Buondelmonte de' Buondelmonti を殺した結果、Marte の呪いが実現してゲルフィ党対ギベッリーニ党の争いが勃発した時だとしている。こうした市民同士の党派争いを激化させた要因は、フィエーゾレの人達や Buondelmonti 家の人達のような市外の人々が流入したことで、「常に人々の混合が／市の不幸の根源」（『天国篇』第十六歌 67-8）だと指摘されている。しかしダンテは近年および将来のフィレンツェの不幸を、そうしたフィレンツェにとって宿命ともいえる古来の原因のみによって説明している訳ではない。ここで忘れてはならないのはダンテの人間を墮落させる悪徳に関する考え方で、周知のごとく彼は『地獄篇』第一歌で「色欲」や「嫉妬」を象徴すると見なされる豹や「暴力」や「高慢」を象徴すると見なされる獅子よりも、「吝嗇」や「食欲」を象徴していると思なされている雌狼を一層危険な悪徳として描いており（49-60）、そうした見方は作品全体を通じて一貫しているのである。だから白黒闘争に関して Ciaccio が、「高慢と嫉妬と食欲が／人の心に火を点けた三つの花火」（『地獄篇』第六歌 74-5）と語った時も、たとえ三番目に記されているとしても、「食欲」の役割が最も大きいと見て差し支えないだろう。さらに『神曲』全体を通じて近年になる程世の中が悪くなっていると嘆かれていて、例えば『地獄篇』第十六歌では、地獄に落とされているモンタベルティ戦争当時の貴族たちですらフィレンツェの近年の墮落ぶりを噂しているとされ（67-72）、またダンテは Iacopo Rusticucci の問いに答えて、「新人たちと手早く得られた富が、／フィレンツェよ、汝の中で傲慢と放埒を生み、／既に汝はそのことで泣いている」（73-5）と叫んでいる。新人とは成り上がり者であり、Cacciaguida のいう市外から来た人々の一部と思なし得るが、「手早く得られた富 (subiti guadagni)」は新しい要素である。だからダンテによるとフィレンツェの不幸は、「人間の混合」に由来する暴力や闘争という「高慢」や「嫉妬」の系統の原因に基づくものの上に、「手早く得られた富」という「食欲」の系統の原因に基づくものが重なって出来ていると思なし得る。勿論いずれの悪徳も人間本来のものなので、それから生じる不幸は多少はいつの時代にも平行して存在していたはずだが、既に見たとおり Cacciaguida の時代にはいずれの不幸も表面化しておらず、Buondelmonte 殺しを境に初めて暴力が表面化したとされている。さらにダンテはより悪質な「食欲」系統の不幸が主流を占める時点をも明記していて、それは次の一節である。「現在金欲しさ (putta) の狂熱 (rabbia) がそうであるのと同じくらい、／当時のフィレンツェでは高慢 (superba) の狂熱が激しかったが、／それがぶち壊された時、彼 (Provenzan Salvani) はその土地 (シエナ) の主だった。」（『煉獄篇』第十一歌

112-14)「高慢の狂熱」とは言うまでもなくプリーモ・ポポロ時代のフィレンツェの好戦熱のことであり、この詩句はモンタベルティの敗戦でフィレンツェの戦争への情熱が一挙に冷めて、それ以後は金儲けへの情熱がそれにとって変わったと述べていて、まさに私が主張しているモンタベルティの敗戦後のフィレンツェにおける気風の変化の証言と見なすことができる。しかしダンテがフィレンツェの発展を否定的に評価しているという事情も影響して、彼が Oderisi d' Agobbio の口を通して語らせているこの言葉は、単にフィレンツェの墮落に関する彼の多くの類似の意見の一つとして扱われ、フィレンツェ発展の一大要因の証言としてそれが有している重要な意味も十分に理解されることはなかった。

Davis も指摘しているとおり¹¹⁾、ダンテが Cacciaguida の時代 (12世紀前半) と1300年前後を比較しているのに対して、Villani はプリーモ・ポポロの時代 (1250年代) と14世紀初頭とを比較している。だから一見双方の比較の対象は大きく異なっているかに見える。しかしダンテによってフィレンツェの不幸が始まったのが1215年のゲルフィ党対ギベッリーニ党の闘争開始の時期だと明記されている以上、Cacciaguida 時代とほぼ等しく幸福なフィレンツェがその時点まで続いていた訳であり、それ以前の時代との比較となると、その差はわずかに45年に過ぎず、両者の比較の対象が一見感じられるほど隔たっている訳では決していない。さらにダンテは1260年のモンタベルティ敗戦を境に、フィレンツェ市民の気風が大きく変化したとして、それ以前の「高慢」や「嫉妬」に基づく暴力の時代と「貪欲」や「吝嗇」に基づく様々な罪悪の時代とを区別しているのであり、それ以後の変化は Villani が記したプリーモ・ポポロ時代と彼の同時代との比較と共通する要素が多く、要するに主観的なニュアンスの差を別にすると、両者はモンタベルティ以後の変化について、ほぼ類似した事柄を伝えていると見なすことが出来るのである。

ところで再び Davis が指摘した Riccobaldo のフェデリーコ二世の時代と14世紀初頭との比較に戻るならば、確かにダンテの語句や Villani の記述との間には、例えば過去には人々が戦闘における勇気や武術を何よりも重んじたとか、生活が質素で服装も極めて粗末だったとか (特に服装に関する記述に類似が著しいようである)、当時は金や銀は少なく女性の持参金も少額だったが、今日の人々は富裕で浪費家で持参金も高く欲張りになったといった類似の指摘が見られることは否定し得ない。しかし Riccobaldo には、かつては夫婦は一つの皿で食べたとか、木の肉切り用俎は使われず一家にコップが1~2個しか無かったとか、週3度しか新鮮な肉を食べなかった等といった記述がやたらと多く、食事への異常なまでの関心が見られ、今日人間が欲張りになったのも「食い意地と野心 (la gola e l'ambizione)」¹²⁾ のせいだとされているほど「食」の比重が高いが、他方ダンテの Cacciaguida はほとんどそうしたことには触れず、その代わり「まだ女の子が生まれても、/婚期が早すぎもせず、持参金も高過ぎもしないので、/父親を脅えさせることは無かった」(『天国篇』第十五歌 103-5) とか、「ああ幸福な女たちよ。/まだ誰もが自分の墓の心配が無く、/夫がフランスに去ったために、空閨を嘆くことも無かった」(118-120) などと異質の重大な問題に触れている。確かに持参金の高額化には Riccobaldo も触れ

ているが、これは順調に拡大していたこの時代イタリア・コムーネ経済の全般的好況から考えて、容易に想像出来る現象である。しかし Villani も証言している結婚年齢の低下は、何らかの具体的関連事項（必ずしも事実ではなくとも）なしでは言及し難い現象である。第二次世界大戦後 Herlihy と Klapisch-Zuber が、フィレンツェ共和国の1427年のカタスト（収税用国勢調査台帳）をコンピュータを用いて分析することによって、15世紀のフィレンツェを中心とするトスカーナ北部の家族の実態を把握し、『トスカーナ人とその家族』という一書¹³⁾をまとめたが、その中でフィレンツェ市民の結婚には「夫と妻の異常に大きい年令差」という特性があることが明らかにされた。さらに同書の中で、そうした現象は早くも13世紀後半以来認められるとされている（p.283）ので、前述のダンテの証言もフィレンツェ独自かもしれない現象と何らかの関連を持たざるを得ないであろう。例えば女性の早婚化も、男性の晩婚化と対応して進行した可能性があり、そうだとすると男性のフランス等へ大量進出が原因だった可能性がある。女性の墓に関する言及も、これまでは単純に夫と同伴して国外亡命する女性が多いことを指していると言明されていた¹⁴⁾が、ダンテ自身の妻のように国内に止まる妻が多いことや、特にフィレンツェには高年令の夫と死別した寡婦が多く、婚家に子供を残して再婚する「残酷な母」が少なくなかったという事実¹⁵⁾等を考慮すると、むしろそれほど狭く意味を限定せずに、字義通り女性全般の運命の不安定さを表現しているという解釈も成立し得るだろう。こうした解釈の当否はともかく、ここでダンテがフィレンツェに固有とも言える程に特殊のかつ具体的な事例を挙げていることは確実であり、また Cacciaguida に代表されるフィレンツェ人たちとの対話は作品の根幹をなす部分だという事実を考慮すると、ダンテの先に挙げた数々の貴重な証言は、外国の年代記から学んだ単なるトポスにはとうてい還元し得ない、同時代の急激な変化の証言だと見なし得る。だからダンテの『神曲』の中でも、モンタペルティ・ベネヴェント仮説にとって有利なくつかの証言を見いだすことが可能なのである。

第二章 「正義の規定」とモンタペルティ敗戦

モンタペルティ敗戦がフィレンツェ市民に及ぼした影響について、私は「精神的ショック」という言葉を用いたが、誤解を恐れずにあえて単純化すれば、それはさきに引用したダンテの「高慢の狂熱（好戦熱）が金儲けの狂熱に転化した」という言葉で表される変化であった。大筋において私はこのとおりだと思うのだが、現代のイタリア・コムーネ史の動向に詳しい方々の目には疑わしい点が少なくあるまい。例えば私は、恐らく今日この分野における最大の権威だと思われる Waley の論文や著書¹⁾の文章を何度か引用しながらモンタペルティ敗戦後の文化的飛躍について論じたのだが、Waley が市民軍が存続していた証拠だとして示した数字を、私はむしろ変化を示す証拠だとして利用したこともあり、また本仮説にとって決定的な意味を持つと思われるその論文「12世紀以降14世紀までのフローレンス共和国の軍隊」の結末を、「(14世紀初頭の時点

では) フローレンスの富はそれ自体の市民(軍)を強化するために用いられていて、市民的道徳的墮落といういまわしい螺旋状下降の中で、より一層多くの富を集めようとして、それを廃絶するために用いられてはいなかった』²⁾ という、この場合直接にはプリーモ・ポポロの時代のフィレンツェを賛美して14世紀以降のフィレンツェ市民を非難していると思なされている Villani や Machiavelli ³⁾ の説の批判なのだが、取り様によってはまさに私の説のような考え方を封じようとしているが如き一文で終わっているからである。(なお Davis も Waley も共に Villani がプリーモ・ポポロの時代を賛美して神話化しているとするが、質実剛健な時代への賞賛とその神話化は認められるとしても、Villani がそんな時代に全面的に好意を示しているとか、本気で戻りがっているなどとは、筆者にはとても感じられない。)

そこで誤解を避けるために記しておく、今述べた Waley の論文はフィレンツェの軍制の変化を民兵から傭兵制度に転換された時期の問題を念頭におきながら論じたものだが、傭兵制度が定着した時期そのものについて特に明確に指摘している訳ではなく、ただ14世紀の当初4分の1ごろまでは、なお従来の民兵主体の軍制が残されていたことを明らかにしたものである。先程引用した箇所を感じられるポレミックな口調は、単に昔の Villani や Machiavelli だけではなく、むしろそれ以上に近代の研究者を意識したもので、19世紀以来の傭兵制度史研究の成果を念頭においたものと見なされるべきである。イタリアの傭兵制度の近代的研究の最初の開拓者は、水力学の技師でピエモンテ軍の中尉を勤めた事もあるが、軍事史の論文コンクールで若くしてその方面の学識を認められミラノ大学で近代史を講義した Ercole Ricotti (1816-1883) で、彼はその著『イタリア傭兵隊史』⁴⁾ において中世イタリア市民の自由の度合は直接軍事に参加した程度に比例していたとする仮説に基づいて、中世からルネサンスにかけてのイタリアにおける傭兵隊の歴史を実証的に叙述している。彼はその著書の中で、フィレンツェでは民兵が主役だったのはダンテが参加したカンパルディーノの戦いまでで、それ以後はすでに傭兵が戦闘の主役を占めていたのだとしている。しかしこの考えに対しては、著名な『モンタベルティの書』⁵⁾ の監修者でモンタベルティ戦争やアテネ公独裁の研究者であり、当然この時代のフィレンツェの軍制にも詳しくなかった Cesare Paoli (1840-1902) が、1302年に白派追撃のためにピストイア包囲攻城を行った際のフィレンツェの軍隊が相変わらず民兵主体であったことを、この戦争で賃金支払いを担当した Buoninsegna Machiavelli の記録に基づいて1867年に⁶⁾ 証明している。こうした証明があったにもかかわらず、Ricotti が提示した変化の図式はその後も一種の定説として生き残り、影響を及ぼし続けた可能性がある。今世紀半ばのこの分野の権威 Piero Pieri は地域としては北イタリア、時代的にはルネサンスを得意としていたためもあって、その著書『ルネサンスとイタリアにおける軍事的危機』⁷⁾ の中で「こうしたコムネの歩兵隊の最後の隆盛は長くは続かなかった。それはモンテカティーニの合戦(1315)でそのピークに達したが、すでにアルトパッショの合戦(1325)では、その凋落を示しているようだ」(p.217) という、一応 Paoli や Waley に近い見解を示しながらも、必ずしも Ricotti 批判とは受け取り難い表現を行っていて、こうした問題を特

に厳密に論じ直す必要を感じていないようである。多少意味は異なるとしても、『ケンブリッジ中世史』第六巻の Previtè-Orton の「モンタベルティがフィレンツェ市民に野外では市民軍は職業的戦力には抵抗できないという‘一つの教訓を教えていた’。だから彼らは自分たちの防御のために、傭兵に頼ろうとする決意を成した」⁸⁾ という指摘も、ほぼ同一傾向の視点に立つものと見なすことができる。またたとえば序文によると「保安隊」と呼ばれていた自衛隊の存在を契機として京都大学の西洋史研究室で行われたと記されている、『傭兵制度の歴史的研究』⁹⁾ という共同研究の報告書(1955)に収められている、イタリア史関係の会田、永井、富岡三氏の論文の中でこの時代を扱っている富岡論文も、主に Villani を資料にしてさきに挙げた Ricotti には近い結論に達しているといえるだろう。要するに Waley の論文は Paoli に似た立場から、それと類似した文献実証主義的方法によって、(Previtè-Orton に関しては敬意を表しながらではあるが) Ricotti らによって流布された既成概念を批判し、フィレンツェの軍制が変化した時期はそれほど早くなかったとする、異議申し立てを行っていると思なす事が出来る。これはフィレンツェの様々な変化の時期を従来よりも遅かったと思なす今世紀後半のフィレンツェ史研究の一般的傾向¹⁰⁾ とも一致している。確かに Waley が批判した Villani の記録を通して見た場合でさえ、傭兵制がフィレンツェの軍制で主役をしいた時期に関しては、Waley の異議申し立ては妥当な様に思われる。しかしその間の経過を辿って見ると、Waley の変化の把握の仕方には古来実証的な研究にしばしば認められる過度の単純化、曲線を直線として捉えてしまう傾向が認められるようである。一つの変化を追跡する場合、それをAからBへの一面的な変化として捉えるのと、蛇行曲線を描きつつある方向に向かっているものとして捉えるのとでは、資料の見方はかなり変わって来るはずであるが、Waley に限らず従来この問題へのアプローチの仕方は、大抵一面的、直線的変化としてであった。しかし当然のことながら、市民自身にも明確には把握されていなかったモンタベルティ戦争以後の気風の変化の影響は、中世イタリア都市の伝統が根強く残っている当時の状況の中ではストレートに制度化される可能性はなく、必然的に試行錯誤を伴わざるを得なかった。だから従来のようなAからBへという直線的な捉え方では把握し得ない。例えば1260年代から70年代の当初には、フィレンツェ共和国はほとんど全面的にシャルル・ダンジュの軍隊に依存¹¹⁾ (つまり資金を払うことで、その助力に頼る、押し付けられた傭兵制を採用) しており、モンタベルティの報復戦であるコッレ・ヴァル・デルサの合戦にさえ参加し損ねた¹²⁾ ことや、その後もタリア(Taglia)¹³⁾ と呼ばれるシャルル・ダンジュ軍の影響の強い一種の都市連合による画期的な傭兵組織に依存し続けたことは、すでに別稿において指摘したとおりであり、たとえカンパルディーノの合戦で一目プリーモ・ポポロ時代の規模に近い復活を見た後、しばらくそうした状況が続いたとしても(実際には騎士の動員数が半数以下に減少したことは既に見た)、その現象を誇大視してモンタベルティ敗戦以前との連続性のみを強調したのでは、明らかに誤った解釈をもたらすのである。事実ポポロの対外戦争の受け取り方は、かつてとは大きく異なっていたのであり、そうした変化が「正義の法規」の制定や、「正義の旗手」職の

確立とも密接に関係していたのは、以下に見るとおりである。そこで本稿の主題である二大事件に取り掛かる前にその前史として、Giano della Bella をリーダーとしたそれらの改革について眺めておくことにしよう。

これら一連の改革は、それを冷静に見る時 Salvemini らが強調¹⁴⁾ し、それ以後のフィレンツェ史研究の一つの潮流となり続けているような、階級闘争史観的解釈に基づく説明には無理が伴うように感じられる。第一にその発端がポポロの主導によるものというよりは、カンパルディーノの勝利以後、市の軍事を担当した貴族が強力になり過ぎて、暴力沙汰を初めとする無法行為が頻繁になり過ぎたことへの反作用であったことや、同じ貴族の仲間にも危機感を抱く者がいたこと、つまり同市で最も古い貴族階層に属しているとされている Della Bella 家の Giano とその弟がその運動のリーダーであったこと、また後に白派リーダーとなる中堅市民 Dino Compagni が Giano の熱烈な支持者であり、Villani も Giano を賞賛しているという事実から見て、この運動が1282年に成立したプリオーレ政体存続のための保守派をも含めた秩序回復運動だったと見なすほうが、より妥当だと思われる。事実「正義の法規」制定による閥族 (magnati) の横暴への厳罰による規制およびその政治からの排除、またプリオーレ政体を軍事的な力によって支える「正義の旗手」制度の成立と共に騒ぎが鎮静化したことは、このことの端的な現れである。閥族の横暴を逆差別的な厳罰によって規制し、閥族と規定された人々をプリオーレ職等から排除したことは、一見階級闘争史観に合致するかに見えるが、実は閥族の規定が全く恣意的であったために、反対派勢力排除と一部貴族とポポロ上層よりなる当時の指導階級の基盤の安定化にとって、最も有効な武器となり得たのである。本来アルテを基盤としていて、原則的には商工業者を主体とすることが建前となっているプリオーレ体制にとって、市内の暴力の管理規制は不可欠で、「正義の規定」はこのため保持され続けたのであった。ただしこの制度が成立した当時の指導者 Giano della Bella 自身の意図が何であったかは、彼が早くも1295年に紛争の責任者として自発的に退去した後にはコムーネ政府によって永久追放処分を受けていることや、同年早くも「正義の法規」に手直しが加えられたことから、今日では正確には把握し難いといわざるを得ない。唯一確実なことは、少なくとも彼は当時の現実がもたらした結果とは異なった何かを指向していたという事実であって、そのことは Villani の以下の証言によって明らかである。それは、Giano が「ゲルフィ党の隊長たちから印章と巨額の動産 (il suggello e' l mobile, ch'era assai) を取り上げてコムーネに移管したいと考えていた」¹⁵⁾ と記録している事実である。これは1293年の「正義の法規」成立直後に、彼が指導する新政権が、「戦争によって何倍も成長し活気づいている大貴族と有力者の力を弱めるため」¹⁶⁾、すでにフィレンツェの攻撃によって弱体化し、陥落間際と思われたピサからの和平の要求を即座に受け入れたという事実と合致する政策で、少なくともポポロの一部にはかなり強力な一種の厭戦気分が存在していたことを裏付けるものと見なし得るだろう。すでに何度も強調したとおり、ポポロ自体は決して本来的にそうした気分を備えているわけではなく、ブリーモ・ポポロ時代に見たように、民主化による気分の高揚は極端な好戦熱を生み

出すことも十分可能なのであり、領土拡大のチャンスを放棄した1293年のポポロの反応はむしろこの時代としては異常なものであった。結局その理由は、この時期のフィレンツェにおける戦争の主導権がすでにポポロの内にはなくて、ゲルフィ党の貴族の手中にわたっていたために他ならない。だから相次ぐ勝ち戦によって勢力を得た一部閥族の思い上がった行動には、ポポロ一般のみならず当時の市の支配体制をも不安に陥れるものがあつたのである。しかし当時のフィレンツェの現実においては、軍事的首脳部としてのゲルフィ党の存在は、たとえカンパルディーノの合戦においてコロソ・ドナーティの越権行為が勝利のために不可欠であつたように、厭戦気分が高まっている分だけ一層不可欠であつた。その部分に手を付けようとしたGianoは、まさに市の指導階層がまともに触れることを避けて来たタブーに挑戦したわけであり、様々な立場の年代記作者たちから賞賛されている¹⁷⁾この指導者の予想外に簡単な失脚の秘密もそのあたりにあるのではないか、と思われる。恐らく当時の市の指導階層の人々にとって、軍事的問題はあまり直視したくない問題だつたと言えるだろう。まだ記憶から消えていないブリーモ・ポポロ時代の誇り高い市民軍を考えると、シャルル・ダンジュー王以来、ほとんど常にナポリ王国の軍隊の協力を仰いでいて、そのため人脈的にゲルフィ党の一部の貴族に牛耳られている現状の複雑さは、良心的な市民にとって決して愉快なものではあり得なかつた。しかし現実にはフィレンツェはそうした不愉快な状況によって未曾有の繁栄を体験しており、また当時のポポロがいかに誇りに充ちていたとは言え、あの敗戦を体験した以上、モンタベルティ戦争以前の状態に復帰することは問題外であつた。Gianoの政策はゲルフィ党にメスを入れようとする点では、こうしたポポロのコンプレックスを直視したものではあつたが、市民の心中に潜んでいるゲルフィ党の現実的成果に対する評価や信頼感を、全く無視したものであつた。現実的なフィレンツェ市民たちは、直ちにその政策がもたらす危険や弊害に気付いたはずであり、この点にこそ彼の急激な失脚劇の一大要因があつたと見なすべきだろう。またその追放後に賞賛の声が高いのも、一面で彼の政策が市民たちの共感を誘つたという事実を裏付けているのである。まさに当時のフィレンツェ市民のアンビヴァレントなコンプレックスを衝くことによって、Gianoは伝説的人物と化した訳である。こうして生じた体制は、一応ポポロ中心で閥族支配への歯止めは掛けられているとはいえ、軍事・外交的には曖昧な点が多くて、特にナポリ王国と法王庁に依存している点では半独立に近く、かつゲルフィ党の支柱を成す閥族にも介入の余地を与えている点で、極めて不安定な妥協の産物であつた。白黒闘争はまさにこうした状況を背景として生じたのであり、フィレンツェをモンタベルティ敗戦以前と同様の一般的なイタリア都市のコムーネと考えていたのでは、到底十分な理解を行うことは出来ないだろう。

第三章 白黒闘争の解釈を巡って

いわゆる白黒闘争に関しては、それがダンテの運命を左右した事件であつたため、古来人々の関心を集めており、Dino Compagni (その作品にも一時期偽書説¹⁾があつて、Malispini 偽書

説の影響でそれが再燃する可能性がないとは断定し得ないが) や Villani らの証言も残されており、また前世紀の末に刊行され²⁾ 後に増補改題されて『白派と黒派 (I Bianchi e i Neri)』という標題に落ち着いた Isidoro Del Lungo の大部の著書を始め、Davidsohn の『フィレンツェ史』第四巻³⁾ その他大量の研究の蓄積があって、その経過の事実関係については、すでに論じ尽くされた過去の問題であるといっても過言ではあるまい。だが、この紛争を如何に解釈すべきかに関しては、必ずしもすっきりした解答が出ていないのではないか、というのが筆者の率直な感想である。Salvemini の影響を受けて、Giano の改造等の解釈においては比較的階級闘争史観に近い解釈を示した Davidsohn も、さすがにこの問題にまでそうした解釈をあてはめることには躊躇しており、「ボニファチオ八世とフィレンツェ」⁴⁾ という標題を与えていることや、またその章の最初の部分でこの法王は身長が1メートル92センチあって、キリストをも馬鹿にしていたというこの桁外れの法王の特異性⁵⁾ を強調しているという事実からも推察し得るとおり、ボニファチオ八世の法外な権力欲にこの紛争の一大原因を求めている、と考えても大きな誤解ではないものと思われる。たしかにダンテも証言しているとおおり、この紛争の背後にボニファチオ八世の特異で強烈な個性があることは、何人も否定しえないだろう。しかし少なくとも Villani の証言を素直に読む時、事実の経過からはもう少し別の解釈が成立する可能性があるように思われる。

周知のごとく、白黒闘争はまずピストイアにおいて、Cancellieri 家の内紛が昂じた結果発生し、当初その調停に当たっていたフィレンツェ市民が、両派をフィレンツェ市内に引き取ったために、双方の言い分を肩代わりすることになり、元来不和だった強力な二家 Cerchi 家と Donati 家をリーダーとする争いに転換したものとして説明されている。彼自身黒派の一族で市政にも深く関与していた Villani の証言は、今日の観点からすると、立場上決して公平とは言い難いものだが、事実の経過の骨子に関しては白派の指導者だった Dino Compagni と大差がないし、時には自分が属している黒派にとって不都合な内幕さえ伝えている。1300年に、法王にはフィレンツェの内紛を調停(干渉)する意志があり、messer Vieri dei Cerchi はそれを拒否⁶⁾ し、市民による派遣された Acquasparta 枢機卿への弩弓による襲撃事件⁷⁾ さえ発生して、その改革案を拒否したため、フィレンツェは同枢機卿より聖務停止令(1300年9月)を受ける。両派が流血沙汰を起こし、一応公平な形式を有しているが、勿論当時実権を握っていた白派に有利な処分が行われる。Villani によると、それに対して巻き返しを図るため、黒派の指導者たちとゲルフィ党の隊長たちが聖トリニタ教会に集合し、ボニファチオ八世に使者を派遣して、フランス王家より兵を率いた調停者を招いてもらうことを決議した、と記録⁸⁾ されている。もしこの記録が真実ならば、フランス王弟シャルル・ド・ヴァロアによるクーデターの立案者は、他ならぬ黒派の指導者たちとゲルフィ党の隊長たちで、法王もフランス王弟もその筋書に従っただけということになるだろう。また白黒闘争の実際の経過を見ても、クーデターそのものはまさしく黒派の主導下で進められ、シャルル・ド・ヴァロア自身はフランス騎兵約500よりなる軍隊と共に、オルトラルノ区に滞在していただけという印象は否めないのである。騎兵500という数字⁹⁾ は、カンバル

ディーノ戦争におけるフィレンツェ軍の騎兵の動員数が600だったという事実¹⁰⁾から見ると、決して少ないとは言えないが、後に見るとおり、もしもフィレンツェのコムーネが一体となって排除しようとするれば、決して無理な数字ではなかった。それにもかかわらず入城を拒否できず(まさにこの点にこそ白派の敗因があったのだが、モンタベルティ敗戦以来のフランスとの関係から絶対に拒否し得なかったのだ。こうした一種の麻痺現象こそモンタベルティ仮説抜きでは決して理解し得ない現象である)、一度城壁内に落ち着かれると、白派政権を転覆させるのに十分な脅威となり得たのである。しかし翻って考える時、いくら内紛を抱えていたとは言え、政権を握っていることの有利さはこの当時でも、いやむしろこの当時であるがゆえに一層大きかったはずである。実際この後に成立した黒派政権の指導階級としての権威は、様々な混乱を体験しながらもその後もほぼ同一家族で世襲されて一世紀以上続き(Albizzi家、Della Tosa家等)、たとえば15世紀初頭に記されたモレリ(Morelli)家の家族年代記¹¹⁾の中でも先祖が黒派に属していたことが誇らしげに語られている。しかもその事實は、この当時ですらある程度現実的な効用を有していたのである¹²⁾。だからフィレンツェ史においてこれに匹敵する政変といえば、少なくとも後世への影響力の持続性という点に関しては、1342～3年のアテネ公の独裁やあの世に名高い1378年のチオンピの反乱をはるかに上回っていると言え、1434年のMedici家による主導権の獲得、あるいは15世紀末の同家追放とその後の復帰を巡る混乱にさえ匹敵するものと見なし得るのではないだろうか。外国人の軍隊を利用したクーデターという、道徳的に決して高くはない政変が、単に成功しただけではなくて、かくも長期にわたって影響力を持続し得たという事實は、やはりフィレンツェ史の持つ特殊性に基づいている、と見なさざるを得ない。その特殊性とは言うまでもなく、モンタベルティ敗戦そのものが、市民の国外進出をもたらし、フランスおよびナポリ王国という南北に広がっている兄弟国家に全面的に協力し依存する体制を生み出して、それがフィレンツェに未曾有の繁栄をもたらすと共に、従来のイタリア中世都市の限界を打破する結果をもたらしつつあった、という市民の共通体験であった。勿論それが従来例のない体験であったが故に、様々な試行錯誤の余地があった。たとえば軍事的側面におけるゲルフィ党との関係は、従来の市民の感覚では、到底容認できない曖昧かつ危険なものであったが、Cerchi家に代表される白派はボニファチオ八世との関係も余りに硬直的であり、その態度から類推して、おそらくゲルフィ党との関係にも配慮の不足があったものと見なし得るであろう。黒派クーデターはまさにその弱点を衝いたものであった。しかしモンタベルティ敗戦以来プライドを棄てて、そうした曖昧さと危険に耐えることのみが発展への道であったこと、すでに後戻りの許されぬところまで発展していて、今更フランス・ナポリ両王国や法王庁からの影響をあわてて排除しようとするのは、かえって危険な孤立への道であることをフィレンツェ市民は体験を通して知っていたのであり、またそれを評価するだけの判断力を有していた。その点で白派は伝統的な中世イタリア都市の独立意識に縛られ過ぎていて、フィレンツェの発展の特殊性に関する十分な理解が欠けていた、と見なさざるを得ない。要するに白黒闘争とは、モンタベルティ敗戦以後の路線を継承する

か、否定するかという将来の路線選択を巡って戦われた紛争であり、結局黒派が一見当時のモラルの点で劣っていたにもかかわらず最終的な勝利を得たのも、フィレンツェ市民の将来の展望をより優れた仕方と把握し、世論を本質的な点で掴み得たために他ならない。恐らくダンテのフィレンツェ批判は単なるトボスではなくて、彼の本音でもあった。彼の感性の深いところではフィレンツェの魅力的な別の面をも十分捕えていたけれども、近年の市民の墮落という一面のみを強調せねばならなかったところに、彼の政治的立場がもたらした悲劇があった。

第四章 ハイน์リッヒ七世の南下とフィレンツェの抵抗

第一節 参考事例：ハイน์リッヒ七世とミラノ

前章で見た白黒闘争当時の白派政権の優柔不断なもたつきぶりに対して、ハイน์リッヒ七世が南下した際の黒派政権の果敢で巧妙な対応は、好対照を示しているといっても過言ではない。以下でまず事実の経過を簡単に眺めた後、二つの事件を比較しながら、何故そんなに異なった反応が生じたのかを明らかにすると共に、フィレンツェ史の特異性を再確認することによって、モンタペルティ・ベネヴェント仮説の有効性を裏付けておきたい。

周知のごとくハイน์リッヒ七世は、ダンテによって大きな期待が寄せられてその作品にも大きく影響を及ぼしており、そのため歴史家のみならず中世文学の研究者からも深い関心が払われ続けて来た。だが筆者の率直な感想では、今日のハイน์リッヒ像にかなりの歪みが生じていることは、否定し難いように思われる。たとえば Davidsohn の場合を例にとると、この皇帝に対してはアンジュー家の君主たちに対して見せたことのない暖かい同情が払われていて¹⁾、余りにも理想化しているように思われる。この場合は Davidsohn 自身が明らかにしているとおおり、ハイน์リッヒがフランス王に対して臣従関係にあり、日常もフランス語を話していたという事実²⁾ から考えて、ドイツ最良という直接的な民族的偏見の現れとは言えないかも知れないが、少なくともハイน์リッヒが伴った軍人の多数がドイツ人だという事実や、彼こそ Davidsohn が嫌悪していたフランス王家の野心を妨害したシャルル・ド・ヴァロアの競争者だったという事実から、やはり間接的には民族的偏見が反映していることは否定できまい。ハイน์リッヒ七世について考える場合、私たちが陥りやすい最大の誤解は、この人物を理想化する余り、たとえ一時的にせよ彼が現実には有していた力を過小評価することではないかと思われる。たとえば本気でハイน์リッヒによるフィレンツェ占領と黒派政権への懲罰への期待を抱いた（そのために彼は祖国にあてて脅しの手紙すら書き送った³⁾ のだが）のはダンテだけではなかった。その証拠に、ダンテと違って市内に止まっていた愛国的市民 Dino Compagni もこの皇帝と同様のことを期待し、それが間もなく実現するだろうという予言の言葉で彼の『年代記』の筆を置いている⁴⁾。勿論後世に生きている私たちは、そうした期待が結局実現しなかったことを知っているのだから、どうしても哀れ

な夢想家のダンテが決して実現するはずのない過大な期待をこの無力な！外人の皇帝に寄せたのだと考えがちである。しかしこれらの人々の期待は、少なくともある時期におけるこの皇帝の現実の力の証言だったとも見なせなくはないし、むしろそう見なす方が妥当なのである。事実ハインリッヒ七世がドイツやオーストリアから率いてきた軍隊は、ブレッシャ包囲の時期に総騎士数が6000騎で、その内4000騎が外国人騎士と記されている⁵⁾点から考えて、シャルル・ド・ヴァロアの軍勢等とは桁外れに大きい規模だったことが明白である。またその軍隊が飾り物でなかったことは、以下で見るミラノにおける政変の経過から推定することが出来るだろう。通史としては時代遅れで、ムラトーリの『イタリア年代記』に範を取ったと思われる年代記類の叙述の集大成に過ぎないものの、むしろ今日では諸記録の要約のみを忠実に記している点が貴重だと評価しうる conte Giorgio Giulino の大著『ミラノ [中世] 後代世紀の記録集 (Memorie di Milano nei Secoli Bassi) 』⁶⁾によって簡単にその過程をたどってみると、当時ミラノでは法王やアンジュー家の勢力との関係でゲルフィ党が優勢を占め、そのリーダーである Torriani (=Della Torre) 家が最も有力であり、大司教の地位を Cassone della Torre が占め、軍事的な指導者で同時に世俗的な権力者でもある「ポポロの隊長 (Capitano del Popolo)」の地位をも Guido della Torre が占めていたとされている。勿論後に領主となる Visconti 家の影響力はすでに強大であり、早くも13世紀後半に大司教の地位を梃にして一時期独裁者に近い権力を確立していたが、その後ゲルフィ党の巻き返しを受けて、1302年以来一族のリーダー Metteo Visconti ら主だった人々は市外に亡命中だった。しかし Torriani 家とその一派はせかくこのように優位に立ちながらも、Guido と大司教 Cassone が対立して分裂、Cassone が市外に逃れるという失態があり、彼らの指導力は必ずしも安定してものではなかった。だからその Guido がハインリッヒ七世の到来を危険視して、その到来について語ることをさえ禁じていたにもかかわらず、ミラノの貴族 Guglielmo della Pusterla らは皇帝に迎えに行こうと提案するなど、その方針は統一を欠いていた。そこで Torriani 派の人々は Guido の屋敷に集合して対策を相談したが、Guido が皇帝到来はゲルフィ党の没落に通じる恐れがあるので、ゲルフィ党の総力を結集して皇帝のイタリア侵入を妨害しようと提案したのに対して、彼の舅にあたる conte Filippo di Lagosto は彼自身が皇帝権力との関係が特に深い Lomello の conti Palatini の一員だという理由で、むしろこの機会に皇帝に属しているイタリア王権の確立に協力し、それによって自分たちの権利を再確認しておきたいという（これは何らかの封建的権力を有する貴族たちには反対し難い立場であるが）立場を主張した。味方の陣営におけるこうした意見の対立が表面化すると、Guido は錯乱状態 (forsennato) になって、「このハインリッヒをどうすれば良いのだ。何の権利があって、こいつは俺の物を取り上げるのだ」⁷⁾ などと言いながら、邸内をあちこちとさまよい歩いたとされているので、大司教との争いも含め、この Guido という人物は見通しは悪くなかったけれども、リーダーとしての資質に欠けていた、と見なすべきだろう。貴族たちから婿を宥めるよう頼まれた conte Filippo は、この時ハインリッヒ七世がギベッリーニ党のためではなくて党派争い

の解消のために来るのだという、ダンテも確信して強調したハインリッヒ調停者説によって、Guido の皇帝に対する不信感を宥めようとしたと伝えられている。これはこの時期に調停者ハインリッヒという皇帝の大義名分の宣伝が、党派を超えて広く信じられていたという証拠だと見なすことができる。その後皇帝がアスティまで来た時、Metteo Visconti と Cassone della Torre は皇帝の許に赴き、二人は両家と兩派とを代表して和解を行っている。こうしてミラノは指導者たちの方針が統一されないまま、皇帝が伝統的なイタリア王（通常皇帝が兼任する）の鉄の王冠の戴冠式のために、当時としては並外れた兵力と Metteo Visconti ら亡命中のギベリーニ党の指導者たちを引き連れてミラノ入りするのを許し、Guido とゲルフィ党は何一つ有効な政変への予防処置を講じることも出来なかったのである。その後盛大な儀式に続き、10万フィオーリーノという巨額な献金を押し付けられ、さらに追加の要求があったために、市民間に反ドイツ感情がたかまり、Guido の息子 Francesco della Torre と Matteo の息子 Galeazzo Visconti との間に敵対する両家と兩派とが協力して反乱を起こす計画が成立したが、直ちにスパイを通して（当然ギベリーニ党や Visconti 家自身による裏切りが想像し得るし、事実そうした声が記録⁸⁾ されている）ハインリッヒのの知るところとなり、まず皇帝が Visconti 家にドイツ兵の一団を差し向けると、事前に皇帝側近の味方から連絡を受けた Matteo は、早速息子たちを奥に隠して武装解除させ、ドイツ兵をうまくもてなして事なきを得た。他方何の連絡も受けていなかった Guido della Torre の一族は、この時計画どおり武装していたために、ドイツ兵との武力紛争に巻き込まれ、勿論盟約を結んでいたはずの Visconti 一派からの支援も受けられずに敗北し、ドイツ兵だけでなくミラノの貧民たちの略奪に会って、たちまち逃走しなければならなかった。ミラノのゲルフィ党を代表したこの一族は、この時の敗北によって転落し、以後昔日の地位を二度と回復し得なかったとされている。この後 Visconti 家も皇帝の疑惑の対象となって、一時は Matteo と Galeazzo の親子は共に市外へ追放されるが、程なく Matteo に皇帝に拝謁する機会が与えられ、彼が巧みに許しを請うた結果「代官 (vicario)」⁹⁾ の地位を与えられ、結果的には Visconti 家が将来この都市とその周辺の地方一帯に確立する領主の地位に大幅に近づくことになる。こうした結果から見る限り、少なくともミラノに関しては、皇帝自身の主観的な意図は何であつたにせよ、Guido della Torre の党派的危惧はまさに的中している訳で、ダンテが強調し、Davidsohn 等近代の研究者にも濃厚な影響を与えているハインリッヒ調停者説は成立し得ないと判断せざるを得ない。

一見関係が薄いミラノの事情について私が長々と記したのは、まずハインリッヒ七世がある時期に有していた軍事力およびそれから派生する政治的影響力が、コムーネとしてはフィレンツェよりもはるかに古く、経済力や武力もこの時期決して衰えていなかったミラノという北伊きっての有力都市で、政変を起こすに足りだけの規模のものだったことを示したかったために他ならない。それと同時に強調しておきたいことは、今記したミラノにおける政変に認められる、白黒闘争との類似である。Cerchi 対 Donati、Torriani 対 Visconti という二家の対立を中心とした白

派対黒派、ゲルフィ党対ギベッリーニ党という対立の図式、勝利者となった Donati 家と Visconti 家が当初市外に亡命中だったという状況、シャルル・ド・ヴァロアとハインリッヒ七世といういずれも外国人君主による、調停者という名目での武力を伴った市内入城とその武力を背景とした混乱、およびその結果としての支配勢力の交代、Cerchi、Torriani 両家に対する略奪とその決定的な没落等、ここには一々対応的な類似が認められる。ただしフィレンツェではゲルフィ党の保守派に近い(親法王派の)黒派が、フランス王弟の僅かな兵力によって勝利したのに対して、ミラノでは皇帝の大軍の支援によってギベッリーニ党が復権しており、また Visconti 家が生き残って領主化したのとは反対に、Donati 家はギベッリーニ党と接近して、白黒闘争からわずか6年後に当主が敗死するなど、むしろ対照的な現象も伴っており、二つの事件の間に認められるのは単なる類似というよりも、一種の対称性だと考えるべきかも知れない。いずれにせよ8年前にフィレンツェの白派を襲った悪夢のような事件が Torriani 家とその一派を襲ったわけであり、自ら類似の状況を勝ち抜いたフィレンツェ黒派が、ミラノの轍を踏むはずはなかった。

第二節フィレンツェをめぐる攻防

少し時期はさかのぼるが、ハインリッヒ七世が皇帝に選ばれた時期に立ち戻り、それ以後シエナ領内で病死するまでの過程を簡単にたどって見よう。周知のごとく、1307年以来法王庁はフランス王 Filippo IV の強圧の下でアヴィニョンに移転していたが、仏王の支援を受けて法王位についた法王 Clemente V は、仏王権からの法王権の独立を守るため、1308年11月27日に辛くも仏王が押し付けた候補者王弟シャルル・ド・ヴァロアを避けて、名目上は仏王の封臣ではあっても比較的その影響を免れており、しかも英明の評判も高いルクセンブルク伯ハインリッヒを新皇帝に指名した。その時点から死ぬまでの期間が約4年10ヶ月に過ぎなかったこの皇帝は、1310年10月にイタリア入りしているのに、1313年8月24日に死去するまでの約3年間をイタリアで過ごし、その大半は反抗するコムーネや反対勢力に対する懲罰のための戦争に明け暮れていた。

この皇帝に対するフィレンツェの反応は、徹頭徹尾不柔順と抵抗に終始していた。ここで白派追放以後のフィレンツェの状況を簡単に眺めておくと、フィレンツェは白黒闘争の直後から、闘争の火元であると同時に追放された白派の拠点と化していたピストイアの討伐に乗り出す。この時期にはまだ伝統的なフィレンツェのポポロの軍制が健在だったことは、すでに見たとおり Paoli の研究¹⁰⁾ によって証明されている。しかしこの時期の戦争の主導権はゲルフィ党によって握られていて、特にこの戦争は黒派の死活問題を左右する性格のものだったことを忘れてはなるまい。ゲルフィ党こそ Giano della Bella の干渉を排除した後、白派の一部を成していた反対勢力の追放を推進した機関であり、当時のフィレンツェ外交の一貫性はこの機関によって保たれていたのである。しかしこの時期に法王庁に生じた政治的な転換の結果として、フィレンツェ

の外交的環境は一変してしまう。シャルル・ド・ヴァロア派遣以後ボニファチオ八世と仏王との協調関係が決裂、アナーニで侮辱された結果ボニファチオ八世が憤死し、その後法王庁はボニファチオの行き過ぎ是正を最大の方針としたとされる¹¹⁾ Benedetto XI の指導下で、前法王の強引な政策の修正を試みる。その修正の影響を最も深刻に受けたのがフィレンツェで、Benedetto は前法王の政策の最大の犠牲者だった Cerchi 家に法王庁への出入りを許して¹²⁾ これを重く用いると共に、オスティアの枢機卿でフィレンツェの近郊プラートの貧民出身であるためトスカーナの情勢に詳しいドメニコ修道会の修道士 Niccolò da Prato (以後通称とおおりプラート枢機卿と記す) を法王使節として派遣し、白黒両派の調停を行かせた¹³⁾。こうした法王庁の急激な方針転換は、すでに1280年代当初シャルル・ダンジュー王のイタリア国内における権力が強大化し過ぎることを恐れた Martino IV が、Latino 枢機卿を派遣してゲルフィ党とギベッリーニ党の調停を試み、一応は両党による14人委員会を発足させたという前例がある。その際には結局混乱が生じてその委員会の機能が麻痺したために、アルテを基盤とするプリオーレ制度が成立するという副産物をもたらした。だから法王庁のこうした方針転換とそれに基づく介入は過去にも経験済みだったとはいえ、一度武力介入によって白派政権を転覆させておきながら、再度白派をフィレンツェに帰国させようと試みているのだから、Benedetto 法王自身の善意には疑問の余地はないとしても、余りにも御都合主義だったという印象は否めないだろう。法王庁きっての切れ者であったプラート枢機卿は、フィレンツェに到着すると直ちに市政改革に着手、恐らく黒派政権への対抗勢力を育成するために、ポポロ団体を改革しプリーモ・ポポロ体制を復活させた、とされている。興味深い事実の一つは、この時19存在していたポホロ地区 (compagnia) の指導者である「地区の旗手」の全ての旗から、アンジュー家の紋章の一部である熊手が取り除かれた、と記録¹⁴⁾ されていることである。このアンジューの熊手の抹消とポポロの自立こそ、モンタベルティ敗戦以前のプリーモ・ポポロの精神を復活させてフィレンツェをナポリ王国やフランスの影響から切り離そうと望んでいる、当時の法王 Benedetto とその代理人プラート枢機卿の改革の意志を象徴的に表現している行為だと見なし得るはずである。また白黒闘争当時まだ一体であった法王—フランス—ナポリ勢力の干渉に抵抗した白派のポポロにも同様の志向があったことは、ダンテや (偽書でなければ) Dino Compagni の数々の証言から推察し得る。しかしプラート枢機卿が故郷プラートの紛争に介入するためにフィレンツェを留守にした隙に、フィレンツェ当局は機敏にこの切れ者を締め出してその干渉を排除してしまい、怒った枢機卿は立ち去り際にフィレンツェを破門する。

1305年フィレンツェはなおも反抗の気配が濃厚なピストイアの息の根を止めるため、ナポリ王国の皇太子カラブリア公ロベルトを総指揮官に招き、ピストイア攻城に着手、法王庁から破門すると脅されたロベルト・ダンジョー (イタリア生まれなので以下こう表記) 自身は戦列から離れたものの、家来のカタロニア人 messer Dego [Diego] della Ratta に自分が率いてきた全騎兵を委ねて代理に任命し、フィレンツェの戦争に協力しており、この時ピストイアは落城して、城

壁を破壊されている。要するに黒派政権は、かつて Latino 枢機卿が干渉した際のゲルフィ党と同様、猫の目のように方針が変わる法王庁からの干渉を、利害の一貫性がより明確なアンジュー家と結ぶことによって対処し、アンジュー家の側でもフィレンツェの期待を裏切ることなく、その政策を支援しているのである。フィレンツェ政府は1306年の末、プラート枢機卿の干渉下で再建された体制に手直しを加え、プラート枢機卿がわざわざ熊手を除いて行った19本の「地区の旗」全てに再びアンジュー家の熊手を描き加えたとされ、またこの時ポポロ自身が「良きゲルフィ党のポポロ (il buon popolo guelfo)」と名乗った、と伝えられている¹⁵⁾。すでにモンタベルティの敗戦を体験し、それ以後ナポリフランス勢力との協調によって未曾有の繁栄を享受していたフィレンツェのポポロは、もはや質実剛健で貧しかったプリーモ・ポポロとは気風を異にしており、今更過去の栄光の再現するために奮闘しようという意志を有してはいなかった、と見なすことが出来る。善意の法王 Benedetto は1304年にイチジクによる毒殺事件で早くも死去し、その後任は容易に決まらず、Villani の伝えるところでは¹⁶⁾、プラート枢機卿が発案した鮮やかな陰謀によって、フランス人の法王 Clemente V が選出されるが、この陰謀にフランス王の協力を得たことが「アヴィニョン捕囚」の原因となった、とされている。実際にそれほど見事な陰謀が存在したかどうかはとも角、その後も法王庁内でプラート枢機卿は実力者であり続けたことは確実で、Bnedetto の死後 Clemente 新法王が選出されてからも、さらに法王庁がアヴィニョンに移転した後も、法王庁のフィレンツェに対する方針は基本的に変化せず、法王庁は1307年 messer Napoleone degli Orsini 枢機卿をトスカーナに派遣して、再度フィレンツェに対する干渉を試みている。この枢機卿がアレツォで騎兵1700よりなる白派とギベッリーニ党の軍隊を編成してフィレンツェ攻撃の用意をしたため、フィレンツェ側は騎兵約3000、歩兵15000という大軍を編成、アレツォ領に侵入して荒らし回ったが、枢機卿軍がその退路を断つ動きを示したため、フィレンツェ軍が一夜にして逃走するという醜態を演じたと記されている¹⁷⁾。この時期にはすでに記録者 Villani は成人していたので、個々の数字の正確さには疑問の余地があるとしても、基本的な事実は信頼し得るものと思われる。その後枢機卿とフィレンツェとの間で一応の協定は成立したが、フィレンツェ側がそれを守らぬために枢機卿は改めてフィレンツェを破門した。この時期フィレンツェでは教会財産に課税するなど、聖職者への風当たりが強まっているが、当然教会側からのフィレンツェ攻撃も厳しくなっていた。

1308年10月、このように破門されていたフィレンツェで、白黒闘争の立役者だったコルソ・ドナーティが当時ピサを支配していたトスカーナ・ギベッリーニ党の首領 Ugucione della Faggiuola と姻戚関係を結んだために告発され、あわてて起こした反乱に失敗して殺害されてしまうが、巧みな機会便乗によって生き抜いて来たコルソ・ドナーティには、この時期におけるフィレンツェの法王庁との不和葛藤が、彼自身による権力奪取のための好機のごとく見えた可能性がある。しかし実際にはナポリフランス勢力と結んだゲルフィ党の基盤は、彼が考えていたよりもはるかに強固で、長期にわたる繁栄の成果として民衆の支持も強かったのである。だから公

然とゲルフィ党に背いた途端に、彼には没落が待っていたのである。市外に逃走したコルソを捕え、落馬して苦しむところ彼に止めを刺してやったのが、ロベルト・ダンジョーがフィレンツェに残して行ったカタロニア人の騎兵隊で、その時の隊長がロベルトの代理 messer Dego の弟だった、と伝えられている¹⁸⁾ が、これこそ当時のナポレーフィレンツェ関係を象徴しているエピソードだといえるだろう。勿論基本的には、フィレンツェの政権にとって法王庁を敵に回すことが極めて危険であったことは、当時体験したばかりの白派の敗北のみならず、八聖人戦争以後にフィレンツェで生じた大混乱などによっても証明されている。だからフィレンツェ史上稀な陰謀家だったコルソ・ドナーティの判断には、簡単に軽蔑しきれないものがある。しかしこの時期の法王庁は遠く南仏にあって影響力が低下しており、しかも白黒闘争における黒派の勝因が単に法王庁を味方につけたことだけでなく、フランス王弟の協力によるところが大きかった点を考慮するならば、結局モンタベルティ敗戦以来の路線を継承してナポリ王国の支持を得ていた、当時の黒派政権側に最も安定した基盤があったことが理解し得るはずである。白派の亡命者の一人であるダンテの『神曲』には、白黒闘争の際には最も派手に活躍したコルソ・ドナーティの死についての記述¹⁹⁾ が認められるが、そこにはボニファチオ八世らに対するような執拗な増悪は感じられず、またむしろドナーティ一族全体に対しては、ダンテ自身好意的でさえある、と見なし得る²⁰⁾。それはダンテの妻がこの一族の出身であったり、彼自身コルソの弟と親しかったためでもあるが、コルソの方でも結局晩年には黒派と対立して、白派やギベッリーニ党に接近していたという事情があるため、そのことも影響していた可能性がある。ところで一時期こじれきったように思われたフィレンツェと法王庁との関係も、1309年ヴェネツィア軍が法王領に侵入するという事態が生じた際、これを撃退するために派遣された法王使節 Pelagrú [Pellegrue] 枢機卿にフィレンツェが援軍を送って法王軍の勝利に貢献したことと、その後同枢機卿をフィレンツェに招いて歓迎し2000フィオーリーノを献金した結果、和解が成立して破門が解かれてしまう²¹⁾。これはハインリッヒ七世の南下を前にして、真に機敏で時宜にかなった処置だったと評価出来よう。この時の法王庁との対立は少なからぬ損害をフィレンツェにもたらしたが、黒派政権にはそうした難局を凌ぐだけの外交軍事政策とその現実的基盤が存在していたことを、率直に評価しておかねばなるまい。

戦いが始まった時にはすでに大勢が決している、という言葉をよく聞くことが多いが、ハインリッヒ七世とフィレンツェとの戦いはまさにそのケースで、実際にこの皇帝がフィレンツェ攻撃に取り掛かった時点では、もはや攻城に成功する可能性は全くなかった。皇帝をそういう状態に追い込んだのはまさにフィレンツェ共和国の外交的手腕であり、その背後には優れた情報網を基盤とする的確な戦略と、それを実現するための総合的な力があったことを見落としてはなるまい。ハインリッヒ七世が皇帝に指名された翌年、1309年の6月父王 Carlo II の死去に伴い、すでにピストイア攻撃の際のフィレンツェ支援を通じて馴染みの深いロベルト・ダンジョーがナポリ王位を継承し、フィレンツェとこの王国との関係の一貫性が保証され、翌年6月にトスカーナにおけるギベッリーニ党の拠点アレッツォを攻撃した際も、前述の messer Dego がフィレンツェ軍の指

揮官としてこれを指導している。ハインリッヒ七世はフィレンツェに書簡を送り、自分が調停に赴くまでアレツォと戦わないように命じたが、この時は主にポポロの主張に基づいて攻略がなされ、貴族の方が慎重だった、と伝えられている²²⁾。この点好戦的なポポロの性格の変化を強調している筆者の仮説と一見やや矛盾するようだが、皇帝が持っている権威の力に対して貴族の方が敏感だったことと、黒派の政策がポポロの支持を得ていたことの証拠だと考えれば、大きな矛盾を生じる訳ではない。いずれにせよこのアレツォ領内への武力侵入は、調停者と自称するハインリッヒに対して、彼にそのような大義名分を認めるつもりはないという、フィレンツェの態度を早くも天下に表明する結果を伴った。1310年7月には皇帝使節がフィレンツェを訪問して、戴冠式のためイタリア入りする皇帝に協力しローザヌまで使者を派遣して出迎えると共に、アレツォから撤兵せよ、という趣旨の皇帝の命令を伝えた。それに対してフィレンツェ市民は大集会を開いて協議し、最初のフィレンツェ側の代表 *messer Betto Brunelleschi* が「傲慢で邪悪な言葉で (*con parole superbe e disoneste*)」返事をしたため、賢い人々に非難されて交代し、*messer Ugolino Tornaquinci* が賢明に礼儀正しく返答したため使節は満足して立ち去った、とされている²³⁾。この時使節は旅の途中でもコムネの領民から迫害を受けており²⁴⁾、使節をいじめることは決して感心したことはないが、一般的なフィレンツェ領民の間にも反皇帝の意識が高まっていたことが推測出来るのである。アレツォとの休戦もローザヌへの使者の派遣もなされず、皇帝使節の命令は無視されて皇帝を激怒させている一方、同年9月30日ナポリ王ロベルト・ダンジョーがフィレンツェを訪問、市民はこれを大歓迎し、王は1ヶ月近くフィレンツェに滞在している²⁵⁾。かくしてフィレンツェの意志は天下に表明されたわけで、その後は些かの変更もなくその立場が貫徹されてしまう。

それ以後翌1311年の春にミラノで生じた反 *Torriani* 家クーデターについてはすでに記したとおりであるが、その経過はフィレンツェの指導者たちや全イタリアの黒派に近いゲルフィ党員に、皇帝の党派性と自分たちの予測の正しさを確信させたに違いない。この事件以後各地で反皇帝の紛争が発生し、皇帝はクレモナを占領した後、5月には再び北上して反抗的なブレッシャの懲罰に向かう。この時の皇帝の兵力はすでに記したとおり、騎兵だけで6000以上、その内すでに当時からイタリア兵よりも精強だと見なされていた独、仏の軍隊が4000を超えていたとされているので、たとえこの数字に誇張があるとしても、当時のイタリアでは久しく見られなかった巨大な軍隊であった。ただし野原での合戦ではない包囲攻城においては、騎士の質が高いことや兵力が大きいことは、大した利点にはなり得なかった。この時ブレッシャは頑強に抵抗、約4カ月も持ちこたえ、その間に皇帝の陣内で疫病が発生して多くの兵士が死に、兵力は約4分の1にまで減少したと記されて²⁶⁾ いる。もしこの時皇帝が直ちに南下してフィレンツェに向っていたら、まだ防備の整わないフィレンツェは占領されていただろう、という説²⁷⁾ もあった。結局占領されてしまったブレッシャには気の毒だが、このような命懸けの挑発が発生したのも、トスカーナでゲルフィ同盟を結成し、ロベルト・ダンジョーの背後からロンバルディーアのゲルフィ党を

支援し扇動し続けたフィレンツェ外交政策の成果²⁸⁾であり、全くの僥倖には帰し得ない。こうして見る影も無く弱体化した皇帝軍は戴冠式のために南下してジェノヴァに到着、ここでは一時的に大歓迎される。同地にはロベルト・ダンジョーの使節も到着して両君主が協定をはかるが、結局まとまらず、その後も一貫してロベルトの妨害が続いた。この年の暮、12月14日皇帝と共にイタリア入りした皇后 Margherita は皇帝軍がブレッシェから持って来てジェノヴァで流行させた疫病のために死去した。皇帝はフィレンツェの度重なる無礼に対し8カ条の罪状を挙げて、同市およびその市民からあらゆる権利が失われたことを宣告し、債権に関する商業上の損害は甚大だった²⁹⁾とされている。すでに衰えたりといえども、皇帝の権威は完全に地に堕ちてはいなかったのである。翌3月皇帝はジェノヴァから海路ピサに着いて援軍の到着を持ち、ようやく1312年4月末に騎兵2000と共に、陸路ローマを目指す。フィレンツェはその間も主にロベルト・ダンジョーが派遣した傭兵を動員して、執拗に皇帝軍の進路を妨害し続け、そのローマ到着後もロベルトと組んで戴冠式の挙行を妨害し続けている。

皇帝は同年6月29日（この日付は Davidsohn による。Villani はその日を8月1日しているが皇帝の二度目のローマ入りと混同しているらしい³⁰⁾）ようやく戴冠式を済ませて一度ローマを去るが、8月始めに再びローマに戻り、8月20日ローマを出て、いよいよフィレンツェの懲罰に取り掛かる。フィレンツェ側もローマへ派遣していた傭兵たちを呼び戻し、トスカーナ・ゲルフィ党の協力を求めることによって、2000騎を集めて皇帝の進路を遮るが、皇帝軍はウンブリアを経て9月7日アレッツォに着き、9月15日簡単にモンテヴァルキの関門を破り、9月18日にはこれまで事ある毎に登場したナポリ王の家来 messer Dego が守るインチャーザの関門でもフィレンツェ軍を一蹴して、Dego は面目を失う³¹⁾。こうして皇帝はその翌日からフィレンツェ攻城に着手したが、その城内には各市の援軍が多数集結してその数は騎兵4000以上、歩兵は無数とされており、騎兵は皇帝軍の2倍以上、歩兵は4倍以上と圧倒的に多かったにもかかわらず、フィレンツェ軍は絶対に城外に攻めて出ることはなく、すでに長い間手間をかけて守り固めていた城壁を頼りに防御に徹した³²⁾、と伝えられている。ブレッシェの例でも分かるように、攻城に際しては守る側が圧倒的に有利であり、この時の皇帝の戦力では完全な包囲すら不可能だった³³⁾。しかもこの年は30年来の豊作に恵まれていて、城内は食糧も豊富でいくらかでも持久戦を続けることができた³⁴⁾。messer Dego が最初に完敗を喫していたお陰で、挑発に乗る物好きもいなかった。こうして一戦を交える事なく攻城を続ける内に、皇帝は重病にかかり、10月31日の夜中に陣をたたくてひそかに立ち去ったが、フィレンツェ軍は全く追撃しなかった。いかにも富裕な商業都市らしい、老練で巧妙な戦いぶりではないだろうか。その後皇帝は面目を失ったためか、サン・カシアーノ、ポッジボンシ、コッレ等といったトスカーナの小さな町を転々と迷走、コッレではロベルト・ダンジョーの軍隊に襲われ、一時はその兵力が約1000騎にまで減少した³⁵⁾という。3月に入ってからようやくピサに戻って北方からの援軍を待ち、その夏にはアルプス以北の外国人騎兵2500とイタリア人の騎兵1500という大軍を結集したものの、フィレンツェ攻撃は放棄したまま

イタリアにおける諸悪の根源だと確信したロベルト・ダンジョーを討伐するために出発した。だが南下の途中シエナ領内で病没、遺体は今日ピサのドゥオモに埋葬されている³⁶⁾。

以上の経過を見る限り、フィレンツェとの勝負は皇帝の完敗であり、少なくともイタリア滞在の後半にはナポリ王国とフィレンツェを中心とするゲルフィ党の同盟軍に翻弄されている、といっても過言ではあるまい。その政策にも戦略にも一貫性が欠けていて、英明で名高かったためにかえって優れた助言者に恵まれなかったらしく、その行動は極めて衝動的である。第一にミラノの政変で調停者という名分と精神的な威信を失い、次いでブレッシャ攻めで物理的強制力まであらかた失ってしまっていて、すでにこの時点で彼のイタリアにおける活動の可能性の限界が決定されてしまった、と見なし得るだろう。だがフィレンツェの黒派政権は、ミラノの政変を見る以前から彼を調停者だとは認めないという確固たる立場を取って来た。すでに見たそれ以前の事情から、当時のフィレンツェの黒派政権にはそれ以外の選択はあり得なかったのである。

たとえば白黒闘争のように、たとえ階級闘争的基盤に立たなくとも激烈な党争が発生し得るのである。その内将来の路線をめぐる闘争は、それが自分たちの将来を決定するという幻想によって、幾つかの階級を縦断する党派を作り上げ、生命や財産を賭けてまで人々を戦わせしめることが可能なのである。従来研究者の間での確かな理解を欠いていた白黒闘争とは、まさにそうした路線闘争であったが、モンタペルティ・ベネヴェント以後のフィレンツェの変化が明確に把握されていなかったために、この時期における路線の対立自体が十分に把握されず、結果としてその理解を妨げていたのであった。

注

はじめに

- 1) 拙稿、中世フィレンツェの知的生産性飛躍の時期と契機、『大阪外国語大学学報』第六十九号(1985) pp.57-77所載、および拙稿、フィレンツェ発展における Carlo I d' Angiò の役割について、『大阪外国語大学論集』、第一号(1989) pp.319-350所載。

第一章

- 1) C.T.Davis, *L'Italia di Dante*, Bologna 1938. 問題の二論文とは 'La questione Malispini (pp.273-287)' と本章注5) 参照。
- 2) R.Morghen, Note malispiniane, in "Bullettino dell' Istituto Storico Italiano", XL, (1920) pp.105-26; La storiografia fiorentina nel Trecento: Ricordano Malispini, Dino Compagni, e Giovanni Villani, in "Civiltà medievale al tramonto", Roma 1973, pp.91-113, ecc. Morghen 教授は BISI 誌上で 1920、1921、1931年の3度にわたってこの問題をくわしく検討した。特にローマの古文書から偶然に発見された Malispini 家の親戚 Capocci 家に関する記述が、作者の言葉を裏付けていると見なされたが、その後のテキストそのものに関する文献学的分析が偽作説を優勢にした。
- 3) M.C.De Matteis, Malispini da Villani o Villani da Malispini? Una ipotesi sui rapporti tra Ricordano Malispini, il 'Compendiatore' e Giovanni Villani, in BISI, LXXXIV (1973), pp.145-221.
- 4) 拙稿、モンタペルティ戦争覚え書、『大阪外国語大学学報』第74-a号(1984)所載、参照。たとえ偽書説

- を採用した場合にも、作者が生まれていなかったモンタベルティ戦争前後の状況について、Villaniのニュース・ソースとなったMalispini的人物が存在したはずである。
- 5) C.T.Davis, 'Il buon tempo antico', in "L'Italia di Dante", op. cit., pp.109-33. (初出はN.Rubinstein編の"Florentine Studies", London 1968所載。)
 - 6) Riccobaldo da Ferrara, Chronica parva Ferrariensis, RR. II. SS, VIII, p.483. Davisは、Malispiniは同時代人にしては道徳的感想が少な過ぎるとしながら、またそこに「古き良き時代」のトポスが認められるのは奇妙だとしているが、論理的に矛盾していないだろうか。
 - 7) C.T.Davis, The Malispini Question, in "Studi medievali", III s., X(1970), pp.215-54.
 - 8) A.Sapori, La compagnia dei Frescobaldi in Inghilterra, Firenze 1947その他、およびE.Fiumi, Fioritura e decadenza dell'economia fiorentina,Parte I, in "Archivio Storico Italiano", (1957 Disp.I,pp.385-439)その他一連の論究による。詳しくは前掲の拙稿、フィレンツェ発展におけるCarlo I d'Angiòの役割について、pp.336-8参照。
 - 9) C. Bec, Lo statuto socio-professionale degli scrittori (Trecento e Cinquecento), pp.229-267 e R. Antonelli e S. Bianchini, Dal Clericus al Poeta, pp.171-227 in "Letteratura Italiana", Vol.II Produzione e consumo, Torino 1983.
 - 10) Dante Alighieri, Il Paradiso, C.XVI, 138.「お前たちの幸せな生活に終止符を打った」
 - 11) C. T. Davis, op. cit., P.116.
 - 12) Id.,p.130.
 - 13) D. Herlihy e Ch. Klapisch-Zuber, I Toscani e le loro famiglie,Uno studio sul catasto fiorentino del 1427, Bologna 1988. 夫婦間の年齢差は第七章特に pp.282-3参照。
 - 14) Dante Alighieri, Il Paradiso, (a cura di N. Sapegno, Firenze 1959) p.202. Butiの注。
 - 15) Ch. Klapisch-Zuber, La "madre crudele". Maternità, vedovanza e dote in "La famiglia e le donne nel rinascimento a Firenze", Roma-Bari 1988, Cap. X, pp.285-303.

第二章

- 1) D. Waley,The Army of the Florentine Republic from the Twelfth to the Fourteenth Century, in "Florentine Studies", London 1968. pp.70-108. およびD. ウェーリー著森田鉄郎訳、『イタリアの都市国家』、東京1971。利用した数字は後者のp.168に掲載されている。
- 2) D. Waley, op.cit., p.108.
- 3) マキァヴェッリ(ママ)り著大岩誠訳、フィレンツェ史 上、東京 1954、p.116以下参照。マキァヴェッリにとっては、共和制ローマに類似していたと思われるブリーモ・ポポロの兵制こそ再建されるべきモデルだったらしく、その業績は手放しに讃美されている。
- 4) E. Ricotti, Storia delle Compagnie di ventura italiane, Voll. 2, Torino 1893. 経歴はEnciclopedia Italiana, Vol.XXIX, Roma 1949, p.278による。
- 5) Il libro di Montaperti, a cura di C. Paoli, Firenze 1889.
- 6) C. Paoli, Rendiconto e approvazione di spese occorse nell' esercito fiorentino contro Pistoia nel maggio MCCCII, in "Archivio Storico Italiano", S. III, T. VI,P. II, (1867).
- 7) P.Pieri, Il rinascimento e la crisi militare italiana, Torino 1952.
- 8) D. Waley, op. cit., p.83より引用。
- 9) 京大西洋史研究室編、傭兵制度の歴史的研究、京都1955参照。イタリア関係の論文は、富岡次郎、フィレンツェにおける民兵制度の崩壊と傭兵使用 (pp.159-195)、会田雄次、フィレンツェ傭兵制と商人政権 (pp.197-264) および永井三明、15世紀イタリア社会と傭兵制度の展開 (pp.265-336)、の三篇でその内特に富岡論文が本論の時代をカバーしている。なおブリーモ・ポポロ政権時代のフィレンツェについては、鬼塚信彦、イル・ブリーモ・ポポロ治下のフィレンツェ、神戸商科大学商大論集Ⅷ(1952)という先駆的で、しかもおそらく今日でも基本的に学会の定説に近い論究があることを記さなければ、公平を欠くであろう。

- 10) 前章注8) で記した Fiumi や Saponi の研究成果や、特に H. Hoshino, *L'arte della lana in Firenze nella seconda metà del XIII secolo*, Firenze 1980 がフィレンツェ商業や産業活動の後進性を明らかにしている。
- 11) 既出の拙稿、「フィレンツェ発展」参照、特に p.342 を見よ。すなわち拙論で利用した Sergio Terlizzi 編、*Documenti delle relazioni tra Carlo I d'Angiò e la Toscana*, Firenze 1950 所収の書簡 138, 431, 432, 463, 613, 625, 647, 813, 886 等に、シャルル・ダンジューがコムーネに金銭の負担を割り当てて、兵員を自分で準備するケースが見られ、そうした関係が頻繁に見られる。
- 12) C. Bastioni, *La battaglia di Colle*, Colle 1970. この小著は コッレ・ヴァル・デルサの コムーネに委嘱された地方史家が、諸文献をまとめて執筆したもので定説と見なし得る。
- 13) L. Naldini, *La "Tallia Militum Secretatis Tallie Tuscie" nella seconda metà del secolo XIII*, in "A.S.I.", Firenze 1920, pp.75-113.
- 14) G. Salvemini, *Magnati e popolani in Firenze dal 1280 al 1295*, Milano 1974 所収の一連の論文。N. Ottocar, *Il Comune di Firenze alla fine del Dugento*, Torino 1962 は前記の諸論文に対する批判である。
- 15) G. Villani, T. III, L. VIII, p.18. 以下で頻繁に行う G. Villani の『年代記 (Cronica)』からの引用は a cura della Multigrafica Editrice, *Cronica de Giovanni Villani a miglior lezione redotta coll' aiuto de' testi a penna*, Roma 1983 (Firenze 1823), T. III, e T. IV による。
- 16) Id., T. III, p. 8.
- 17) Dino Compagni は Giano に傾倒していた。Dino Compagni (con note di Gino Luzzatto), *Cronica*, Torino 1968, pp.31-8. しかし黒派の Villani ですら、「彼は最も忠実で正しい人民であり、フィレンツェの人の誰よりも公共の幸福を愛したし、コムーネから奪うよりも捧げた人だった」としている。Villani, op. cit., p.19.

第三章

- 1) D. Compagni, op. cit., Introduzione, pp. XXXVII-XLI. やはり Scheffer-Boichorst が主張。
- 2) I. Del Lungo, *Da Bonifacio VIII ad Arrigo VII*, Milano 1899.
- 3) R. Davidsohn, *Storia di Firenze*, Vol. III, Firenze 1973.
- 4) Id., Cap. I, pp. 3-354.
- 5) 身長は 1603 年に墓を開いた時測定 (Id., p. 5)、またキリストを偽善者だとした (pp.11-12)。
- 6) G. Villani, op. cit., p.58.
- 7) R. Davidsohn, op. cit., pp.175-6.
- 8) G. Villani, op. cit., p.63.
- 9) Id., p.68. Davidsohn, op. cit., p.213 にもこの数字はそのまま引用されていて、彼は pp.211-212 において、その兵力は小さくゲルフィ党連合の軍隊の辛うじて半数だとコメントしている。
- 10) D. ウェーリー、前掲書、p.168 による。
- 11) G. Morelli, *Ricordi* (a cura di V. Branca), Firenze 1956, pp.132-133.
- 12) *LA CRONICA DOMESTICA di Messer Donato Velluti* (a cura di I. Del Lungo e G. Volpi), Firenze 1914, pp.241-252. ここでも純粋なゲルフィ党黒派かどうかが問題となる。

第四章

- 1) R. Davidsohn, op. cit., Cap. III, *Spedizione di Enrico VII a Roma e sua fine*, pp.477-759.
- 2) Id., p.479.
- 3) Dante Alighieri, *Tutte Le Opere* (a cura di Luigi Blasucci), Firenze 1965, pp.324-330, Epistole VI.
- 4) D. Compagni, op. cit., p.197.

- 5) G. Villani, op. cit., T. IV, p.17.
- 6) Il conte G. Giuliani, Memorie spettanti alla storia, al governo ed alla descrizione della città e campagna di Milano nei secoli bassi, Milano 1974(Milano 1855). pp.850-892.
- 7) Id., p.852.
- 8) Id., p.876.
- 9) Id., p.891.
- 10) 第二章注6) 参照。
- 11) R. Davidsohn, op. cit., p.370.
- 12) Id., pp.358-359.
- 13) Id., pp.379 sgg.
- 14) G. Villani, op. cit., T.III, L.VIII,p.119.
- 15) Id., p.164.
- 16) Id., pp.148-154. Davidsohn は、コンクラーベにおける同枢機卿の決定的に重要な役割を認めつつも、陰謀自体は存在しなかったと否定している (op. cit., p.415)。
- 17) Id., p.167.
- 18) Id., pp.179-182.
- 19) Dante Alighieri, Purg. C. XXIV, 82-87.
- 20) 拙稿、ダンテの作品における「家」の意味(2)、『イタリア学会誌』第二十六号(1978) 所載、pp.8-16、五 ダンテの「家」の原像、参照。
- 21) G. Villani, op. cit., p.195.
- 22) Id., p.198.
- 23) Id., p.199.
- 24) R. Davidsohn, op. cit., pp.610-611.
- 25) G. Villani, op. cit., T.IV, L.IX, p.10.
- 26) Id., pp.17-21. Davidsohn は、騎士と従者併せて7700、歩兵無数としながら、この戦闘で兵力が四分の一以下に減少したという説を受け入れている (op. cit., pp.597-603)。
- 27) G. Villani, Id., p.17.
- 28) フィレンツェはブレッシェに資金のみならず、援兵をも派遣したとされている (R. Davidsohn, op. cit., pp.600-601 e pp.605-610)。
- 29) Id., p.632 sgg.
- 30) Id., p.656. G. Villani, op. cit., p.37.
- 31) Id., pp.40-41.
- 32) Id., pp.41-44.
- 33) R. Davidsohn, op. cit., p.674.
- 34) G. Villani, op. cit., p.43.
- 35) Id., p.47. しかしたとえ1000騎でも、シャルル・ド・ヴェロアの軍隊の2倍の兵力である。
- 36) R. Davidsohn, op.cit., pp.748-756.

(1991. 4. 27 受理)